草壁焔太五行歌集

心の果て

市井社

心の果て

はしがき

私が五行歌を考えたのは、昭和三十二年の秋のことであった。それから、およそ三十七年が過ぎた。この間、私は詩が九割、五行歌が一割くらいの割合で、詩作してきた。

五行歌の発表は、詩集や自分の作った雑誌のなかでやってきた。私の五行歌は、詩集のなかでは、読んだ人の意見によると、詩の一種として読まれてきた。私のなかでも、歌は詩であり、詩はまた歌であった。

四、五年前、旅行の途中である歌を作ってから、急に私は五行歌にとりつかれたようになった。詩が一割、五行歌が九割となった。長期間、五行歌に没頭したことで、五行歌のリズム、メロディが日常を占めるようになり、自分が当初想定した以上に自然なものができてきたような気がした。

私は、詩歌では恋愛詩を中心に書くほうであったが、メーンテーマがこの数年のあいだに変わり、ものの考え方がいささかはものさびてきた。このことも、自分のリズム、メロディの変化と関係があるかもしれない。

五行歌を発想したのは、まだ十九歳のころであったが、私は主要な古典と明治以後、昭和中期くらいまでの主要な歌、口語歌、主な論争などをそれまでに読んでいた。人間形成の時期にこうしたものを自然に読んでいたため、日本の詩の音韻について常日頃から関心があり、すでに歌も作っていた。

私を悩ませたのは、歌のあまりの調子の高さだった。自分の感じていたことが、異常に

悲痛になったり、高揚しすぎたりする。歌を直していくと、だんだんにその感情が激しくなる。それで、できたものは、最初に感じた詩的実質とは似ても似つかぬものになってくるのであった。

そこで、私の考えたことは、短歌のリズム、メロディの枠を広げ、様々な詩の感じを現せるようにできないかということであった。それも日常使っている現在の日本語、つまり口語で作りたいと思った。

口語で思ったとおりに作り、発想も自由にしながら、なおかつ、世界の詩歌で最も優れた日本古典の短歌の質にまで高めることはできないだろうかと、考えているうちに、私は記紀歌謡のリズムの特徴にその方法のヒントをみつけた。呟くような心もちで自在に五つの句を展開すること、それには、歌を五行に分けて書くのが、最もよいことにも気づいた。

倭（やまと）は
国のまほろぼ
たたなづく
青垣（あおかき）
山隠（ごも）れる
倭しうるわし

古事記にある倭建命（やまとたけるのみこと）のこの六句の歌は、四・七・五・四・六・八となっていて、そ

の後発展した長歌、反歌のように五・七にあまりこだわっていない。記紀歌謡にはこのような例は非常に多く、かつ一方で「八雲たつ　出雲八重垣……」というような完全な短歌形式も一、二割含んでいる。

これを口語で再現するような気分でちょっとやってみたらどうかと、三つ四つ作ってみたところ、まさに求めていたようなリズム、メロディが得られたような気がした。

どんな
ステンドグラスを
通り抜けてきたのか
君の
薔薇色の頬

といったものである。こういう雰囲気のものが古典にあったリズムで、ソフトに歌いこなせるのであれば、どういう詩も短歌との関連において可能になる。この形の短詩型は、日本語のリズム、メロディからいって、当然あるべきものであったが、記紀歌謡三百年の時代を経て、人麿ら天才的なうたびとが「長歌・反歌」への大改革を果たしたときに整理されて以来、忘れ去られてしまったのだと思った。

そこで、自然に日本語使用者たちが作っていた詩歌に帰ってみれば、高すぎる緊張度としての制約をもつ短歌形式を正確に位置づけるとともに、新しい自然な、同時に原初の「うた」でもあるものを可能にすると私は考えたのである。

実際これによって、短詩で歌える心の範囲は非常に広がったはずだと私は思っている。五行歌を作っている人は、いまでは一千人くらいいるといわれるが、これもその自由さのゆえであろう。

この集を読んでいただけばわかるように、五行歌には完全な短歌の形も当然含まれている。それも、とくに叙景歌の場合に、私はよく五七五七七を使うということにも気づいた。心理からくるより、形の描写に依存しようとするときで、心情的にはパターンに「はまりたい」ときである。自分自身の根からきたような発想のさいには、むしろ五七のパターン以外のリズム、メロディが心のなかから「くる」という感じである。

しかし、私はとくに分かちがたい二つの心境を、どちらも除外しようとは思わない。それこそが、ほんとうの意味で形式にとらわれない誠実の道ではないかと思うからである。

私は、いままでの世界の歴史のなかでも、最も良質な詩は日本の古典短歌を中心とする短詩だと思っており、私の生きる目標も数人の欧米詩人と、忠度、業平、西行ら、そして芭蕉であった。短歌は現し得るポエジーの範囲が狭いと思うだけで、短歌に反対するものではない。

私は、いままで、自分の仕事を果たすまではと、非常に生命を惜しんできた。しかし、最近は最低限度であるが、自分の仕事は一段落したと感じ、ようやく自分への約束から開放されたように感じている。これからは、もっと奔放に思ったとおり生きられるという喜びを感じる。その気持ちがこの集の歌にもすこしは反映しているであろう。

本書には、私の自筆墨字の歌も載せたが、これは活字だけであるよりはよいであろうという方針に従ったものであった。いままで練習したこともない。そこで相談した人が「書

というものは、まずいほどよい」といったので、私は意気揚々として正月に約五百枚書き、そこから自分の性格の素直に出ているものを選んだ。

結果として目ざわりになるのか、活字だけよりよいのか、よくはわからない。事実をいえば、私に讃め言葉を強要された人々も苦しみ、装丁の上村さんも大変に苦しんだということである。

ここまで詩歌を続けてくることができたのは、詩歌のようなぜいたくなことに生活を費やすことを許してくれた身近な人々のおかげであった。詩人が一人いると、家が滅ぶというくらい厳しい世の中の現実はいまもかわりない。実際は家だけではすまず、付き合う人みなに迷惑をかけるのである。いままで、私と接した人々に、深くこうべを垂れたい。

また最後に、この五行歌集のために、困難な立場から一文を寄せて下さった『日本歌人』の前川佐重郎氏に、深く感謝する。

平成五年一月二十七日午前

草壁　焔太

目

次

はしがき　2
心の果て　10
花　18
五十三歳の問題集　22
ホトトギスの空　34
月　光　40
子別れ　44
悲しみのカボチャ　49
夏はきにけり　55
暗闇をめくれば　62
爪先立ち　68
ほてい　82
桜　餅　88
孤　立　96
真夜中の旗　104
心の骨格　110
師逝く　123

口放浪　127
もやい舟　134
木　片　148
朝ごたつ　156
恋愛歌拾遺　166
多人種の国　172
スキップ　180
異　性　194
島の旅　200
ふるさとの島　206

自筆五行歌索引　218

新たな短詩型の風貌　前川佐重郎　221

装丁／上村ゆみ

心の果て

花は散る
月日や水と
遊ぶように
心も砕けて
そこらに散らばれ

こんなに
寂しいのは
私が私だから
これは
壊せない

水本 烽

透明な
魚にも
淡い影がある
水底にほら
陽炎(かげろう)のように

広がって
広がって
空の果て
心の正体は
空(そら)だったのか

行け行け
心よ
果てなく
行けるのは
おまえだけだ

はるかな
旅路であった
道草に
残してきた子
五体

古傷が
静かに
輝いているようにも
思える
年月の不思議さ

月光に
かがやく
真夜中の
水面と
話をする

ぽったりと
落ちてゆく
宇宙のなかで
恍惚と
生きてる

ああ
大きな不運もきた
若い日の
幸運の影だろう
なぜかほっとする

夜が
ぽきっと
割れるような
信念の
ゆらぎ

影の世界から
光を放つ
そのような
真夜中の
落石よ

この
手の上の光
歴史上の
誰の手の上にもあったのか
実に不思議だ